

白線が消えかけ、ガタガタとしたコンクリート上を、歩いている。ふと顔を上げれば、散乱したがらくたから放たれる異臭が、鼻をつく。町の方を見下ろすと、年季の入った建物が、疲れた顔で並んでいるように見える。あの学校も、病院も、消防も。自分にとって関係のないものだ。教育や医療、災害への対処などはすべて、お金持ちのためにある。大金がはらえない自分たちに、それを利用する権利など、ない。犯罪が、日常に紛れ…

こんな世界を、どう思うだろう。おかしい。ありえない。考えられない。そう、税がない世界とは、私たちにとって考えられもしない世界なのだと、私は知った。

私は、「税」を身近に感じたことがなかった。唯一思いつくのは、消費税。10%に引き上げられ、ちょっと損をしている気分になるくらいだった。税が何かの役に立つ、とわかってはいても、実感がわかなかったのだ。

私が税について考えるようになったのは、自分がコロナウイルスに感染したとき。心の中は、不安でいっぱいだった。私の祖父は、肺が強くない。入院したこともある。絶対に、祖父にうつしたくなかった。感染した自分が悪い者のように思えて、部屋に閉じこもるようにしていた。一人だけの静かすぎる空間は、私の気もちを一層暗くした。そんなある日、家に大きなダンボール箱が、いくつも届いた。中に入っていたのは、大量の支援物資。日用品や食品が、隙間なく詰めてある。予想以上の量に、家族そろって目を輝かせた。外出ができなくても安心できる。心まで落ちつくようで、嬉しかった。しかし、一つ疑問もあった。コロナ陽性者が増加する今、その全員にこんなサポートができるのだろうか。そのためのお金は、どこから出るのだろうか。

調べてみると、国民が納める税の存在があった。それは支援物資以外にも、医療体制や感染拡大防止の整備、薬の開発など、コロナ禍において重要な役割を果たしている。私はその事実を知って、自分が国から応援されているような気がした。一人じゃない、悪者じゃない、と思えた。税金はその他にも、さまざまなことに使われている。例えば、警察や消防、道路や水道などの公的なサービス、年金や医療、福祉、教育など。身近に税を感じなかった自分は、身近すぎるほどの税に気がつけていなかったただけなのだ。学校で学ぶ。ケガをしたら、病院へ行く。警察や消防が、安全を守る。私達の日常は、税によって豊かさを維持していると言えるだろう。

近い将来、私も税を納める一人の国民になる。それだけで、私が支える社会、私が支える未来ができる。そんな、明るさとあたたかさに包まれた世界を創る、社会に貢献できる大人になりたいと思った。